

ブルドーザー

藤 田 典 子

船木先生との出会いはこの言葉からでした。「ブルドーザー」。教員である船木先生と職員である私との接点は、共通の趣味である山登りを通して不動のものになりました。

佛教大学の職員として奉職し、数年たった頃のこと。山のぼりを先輩にすめられてから毎年のように夏山へ、秋山へ、かりたてられるように登っていた頃でした。別の先輩職員から「佛教大学教職員山の会」というサークルがあることをききました。この時が船木先生との初対面です。早速そのすすめもあり、このサークルに入り夏山登山に参加しました。確かそのときは、北アルプスの槍ヶ岳への登山計画で、8名のメンバーで3泊4日の行程、最後に温泉つきのプランだったように記憶しています。登り始めは何とか全員が遅れまいと登っていたものが、時間がたつにつれてバラバラになり、さて気がついた時には、船木先生と私の二人で先頭をただ黙々と歩いていたのです。時折休憩をとる間も、お互いに気を遣っていたのか、さほど会話を交わすこともなく、それぞれに給水し、汗をふき、計ったようにまたどちらからともなく歩き始める。そんな繰り返しが数時間続いた後の休憩地点でのことでした。私から思い切って声をかけてみました。「先生、この景色すばらしいですね。今日は天気もいいし、ほんとよかったですね。」「うん。そうだね。」何でもないこの単純な会話が、船木先生が私を山仲間として認めてくださったように感じた始まりでした。実際、その日は快晴で尾根沿いを歩いているため見晴らしも良く、いっしょに歩いているメンバーとそのすばらしさを共有することも、楽しみのひとつもありました。休憩を重ねるたびに、会話が増えていったのはもちろんです。美しい自然を目の当たりにして、お互いの山登りでの経験や大学でのこと、家族のことまで話は尽きませんでした。ほんとうに自然体で無理がなく、お互いに無

邪気に語りあったあの時のことを、空の青さと槍ヶ岳を背景にしてとても鮮明に覚えています。このとき私は、なぜかしら船木先生が英文学を語られるその理由が、感覚として理解できたように思いました。がむしゃらに目的に向かって黙々と歩き、合間にみるその語らいを見て取って、私は船木先生には静と動が混在しているなどと思いながら、こうやって先生とこの瞬間を過ごせることの満足感を感じていました。

結果として、地図にあるコースタイムよりも随分早くに目的地に到着して他のメンバーを迎えるのが、船木先生と私の役のようになっていました。そしてその頃から船木先生のことを、皆が愛情を込めて「ブルドーザー」なんて呼称していったのです（さて私はいったい何と呼ばれていたのかしらん）。ある時は著名な山の雑誌のグラビアにも、私達の山行が掲載されたほどの勢いもありましたものね。先生。

こうして幾度となく山の会のメンバーとともに繰り返した山登りでしたが、さすがに私はもうここ数年間山登りとは無縁の日々を送っています。しかし船木先生は無縁どころか、年数を重ねるごとにご自身の山登りの歴史を着実に作っておられます。国内にとどまらず、海外にまでその拠点を延ばされています。そのご活躍はここで挙げればきりがありません。でもご存知でしょうか。船木先生は、決してスキーをされないことを、そしてゴルフをされないことを。これらは自然には矛盾した趣味であるというのが持論でいらっしゃるからなのです。山への憧憬を抱いた純粋なそのお姿は誰もまねは出来ないと思います。

いまこうして船木先生への贈る言葉を述べさせていただくことを誇りに感じているとともに、船木先生の山への愛情がいつまでも続くことを祈念しています。

それでは〇〇岳の頂上でお会いしましょう。